

◆授業に関するアンケート◆ 「2018 年度秋学期 授業に関するアンケート総評」

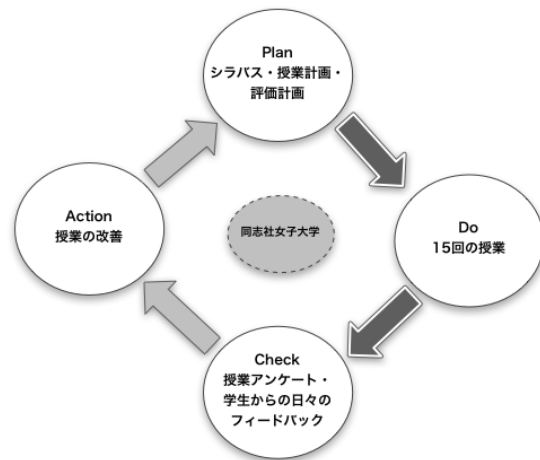
教育開発支援センター長 若本夏美

はじめに

授業に関するアンケートのまとめ（総評）をすることの意味はどこにあるのでしょうか？大西秀之、前センター長（2016 年度～2018 年度在任）は、2017 年度に改定が行われた授業に関するアンケートが 2 年目を迎え現在の形式のアンケート結果を累積的に追跡できることにより経年的な変化などの検討が可能になったことを「このような蓄積は、教育の内部質保証をはじめとする大学における PDCA サイクルの実践に貢献することが期待できます」（*FD Report* Vol. 12, p. 31）と述べておられます。

実際、授業アンケートに必要となるエネルギー、時間、経費は少なからぬものがあります。教員の立場からは学期の終わりの時期にうずたかく（少し大げさですが）積まれたアンケートの束を前に、忘れないようにしよう、何回目の授業のどの部分で実施しようかと想いをめぐらせ、学生はほぼ既に 90%以上が過ぎ去った授業（講義・演習）を振り返りながら真剣な面持ちでアンケートに臨みます。学部学科事務室や教育開発支援センター運営委員の先生方は全ての授業で実施されるように先生方への声かけを行い、教育開発支援センターでは実施結果を素早く、記述統計をもとにグラフなど分かりやすい形の資料として公開の準備を始めます。

大西先生も述べておられるように PDCA サイクルというメタ認知過程は学習だけでなくカリキュラム開発、授業、はたまた企業における作業工程や事業改善にも広く利用されている重要な概念です。同志社女子大学で行っているこの授業アンケートは緻密で計画的に行われ、データの蓄積もなされているなど世界の他大学と比較をしても肩を並べるくらいの優れたものであると自負しています。ただ、そ



のデータを有効に活用しているかという問題がないわけではありません。図 1 が PDCA サイクルによる授業改善の過程ですが、Plan→Do→Check はあってもその後の授業の改善の部分にあたるところの Check→Action が充分なされているとは限りません。なぜならこの部分は各教員にその行動が一任されているからであり、実際にどのように改善されたのかは教員ひとりひとりに依存しているからです。アンケート結果送付後の「授業アンケート・教員コメント」はその意味では重要な役割を担っていることになります（この部分を更に強化するために 2019 年度春学期からは「授業振り返りシート」が導入されます）。その際、前年度のアンケートの結果との比較や同じジャンルの他の授業との比較をすることに

よって、授業改善計画が立てられることになります。しかしいくつかの難問が待ち構えています。

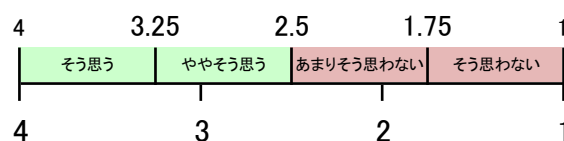
- A) 中高等学校の授業と異なりその授業は1年後にしかやってこないため、実際に次の授業計画を立てる頃には忘れてしまっていることがある
- B) 学科の授業の動向、いわゆる Big Picture が分からない
- C) 学科の授業がどのように改善されているか、現在何が課題になっているかという変化動向が分からない

先日、学会（LET 外国語教育メディア学会、2019 年 5 月 11 日、関西国際大学で開催）に基調講演者として来日されたトロント大学名誉教授の Alister Cumming 博士と個人的にお話をさせて頂く機会がありました。Cumming 先生は私がトロント大学博士課程在学中の恩師に当たります。もう 20 年ほど前のことです。当時からトロント大学では授業アンケートが実施され（アンケートは授業担当者ではなく事務職員や TA などが実施。担当者の目前ではないという点では 2018 年度客員研究員として在籍させて頂いたオックスフォード大学も同様でした。この点は次期改善のポイントであると思います）、担当者はアンケート結果をもとにレポートを書かなければいけないことになっていました。その点について先生にお尋ねしたところ、実際にレポートを書いてもそれを次の授業に活かしてゆくのはなかなか難しいことだったと述懐しておられました。このように、この「C→A」の部分は私達だけでなく、現在でも世界中の大学が知恵を絞っているところであると思います。

この総評はささやかではありますが、そのような背景から、特に B) 全体の傾向、及び C) 前年度からの変化動向について、11 学科学科主任及び共通学芸科目、キリスト教・同志社関係科目、外国語科目、スポーツ・健康科目、教職に関する科目代表によって作成された報告書をもとに、全体のまとめの報告をもとに総括することを意図しています。ただ、本格的な「分析」は今後、統計的手法によって行うべきであることは言うまでもないところです。

質問項目ごとの分析評価について

アンケートの質問は 4 件法（4＝そう思う、3＝やや そう思う、2＝あまりそう 思わない、1＝そう 思わない、0＝わからない）を採用していますので、「2.5」が閾値（肯定的か否定的かの境目）になります。また、3.25 以上は強い肯定、3.25～2.5 は弱い肯定、2.5～1.75 は弱い否定、1.75 以下は強い否定を示します。



(1)「授業実施に関する質問」の結果について

Q1. シラバスとの合致

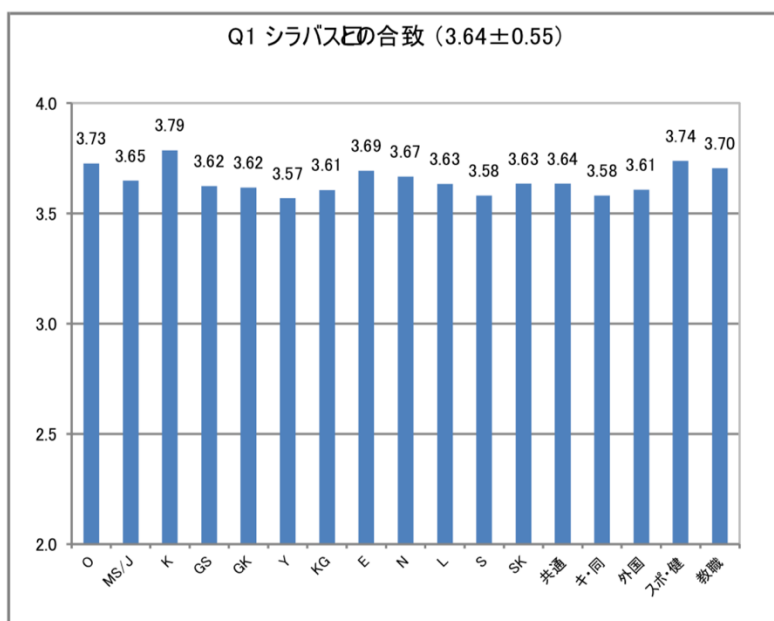
全体結果

「Q1: 授業内容はシラバスに合っていましたか」

すべての学科・科目区分で平均が 3.5 を上回っていました。春秋の違いはありますが、同じ区分の平均値が 3.60 (2017 年度春学期) → 3.63 (2018 年度春学期) → 3.64 (今回: 2018 年度秋学期) と全体として上昇傾向にあります。この結果から、全体的な傾向としてほとんどの授業でシラバスに沿った授業が展開されていたと評価できます。シラバスには特に評価方法についての記述もあります。シラバス通りに授業が行われることは学生にとっても教員にとっても「当然」と受け止められている傾向が進んでいると思われます。この点は同志社女子大学としてほぼ「達成できた」ものと考え、今後はより一層わかりやすく実現可能なシラバスの構成方法を議論する時期に達していると考えていいのではないかと思います。

学科・科目区分コメント

特に、「肯定的な評価（そう思う・ややそう思う）の合計が約 93%で、多くのクラスで「そう思う」が最多の選択率であった」（共通学芸科目）、「否定的な評価（あまりそう思わない・そう思わない）は 1%程度で、全科目区分の中で最低であった。」（スポーツ・健康科目）というコメントが注目されます。全学科の学生が受講するこのような科目群でのシラバスと授業の合致は重要であり、授業を円滑に進める基盤となると思います。



Q2. 受講生の理解度

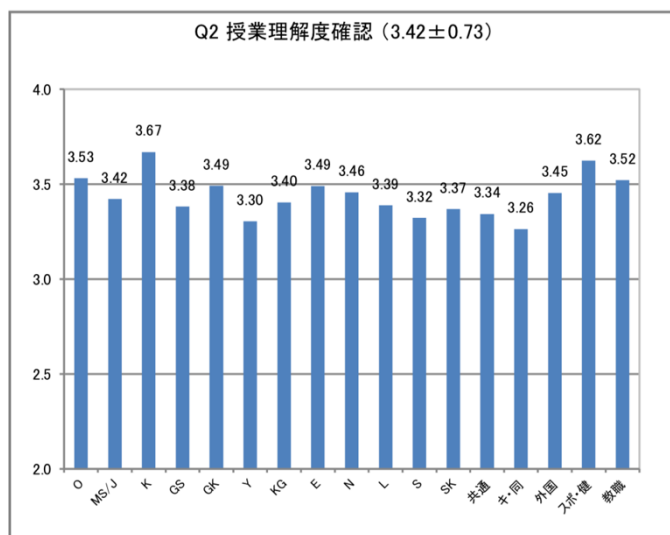
全体結果

「Q2: 受講生の理解度を確かめながら授業が進められていましたか」

同じ区分の平均値が 3.31 (2017 年度春学期) → 3.38 (2018 年度春学期) → 3.42 (今回: 2018 年度秋学期) とすべての学科・科目区分で平均が 3.25 を上回り、全体として上昇傾向にあります。3 学科では 3.5 を越えているものの、その他の 8 学科は 3.5 を下回るなど学科間によるばらつきは多少あるようです。この点は同志社女子大学としてほぼ「達成できた」ものと考え、今後はより一層理解度が確認できるような授業の在り方を柔軟に議論する時期に達していると考えていいのではないかと思います。

学科・科目区分コメント

平均値が比較的低い学科のコメント、「やや低いポイントになっているのはクラス規模が大規模なため、受講生の理解度を直接、見つつ授業進行することが困難な状況があるものと思われる」(社会システム学科)、「特に受講人数の多い授業では理解度を確かめるのが難しい傾向があるようですが、各教員が具体的な対策を講じ、あるいは検討しています」(人間生活学科)に見られるように、受講生の理解度を確認しながら授業をすすめることは学科の定員やクラスサイズの大小によって影響されているようです。この点については SA (Student Assistant) や TA (Teaching Assistant) の活用など教員や学科での一層の取り組みが必要であることは言うまでもないところですが、学生/教員比率を下げるなど大学としての教育環境の一層の充実が求められるところです。



Q3. 授業レベル

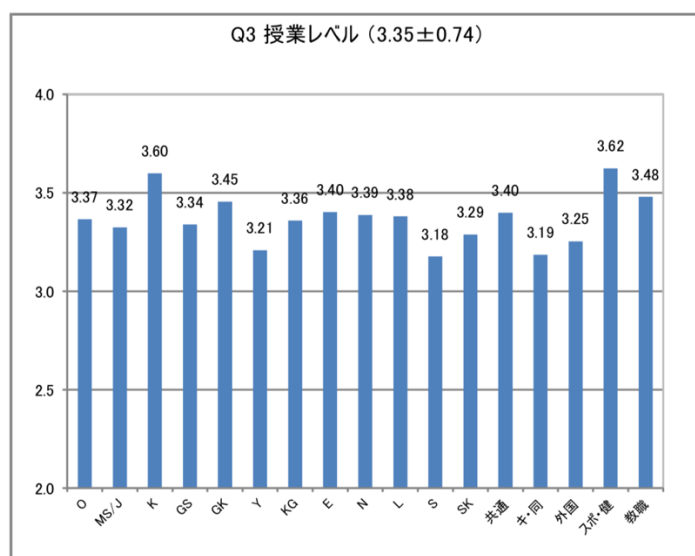
全体結果

「Q3: 授業レベルは自分に合っていましたか」

同じ区分の平均値が 3.25 (2017 年度春学期) → 3.38 (2018 年度春学期) → 3.35 (今回: 2018 年度秋学期) と全体としては高止まり傾向にあります。これは学生の理解度を丁寧を確認しながら授業をすすめる工夫をするなど、ひとえに一人ひとりの教員及び各学科・各科目区分で取り組まれた授業改善の成果にほかならないと評価できます。この問題は受講学生の学力レベルと授業目的との難しい関係に依存するところです。特に大人数クラスではレベル調整が困難となるのは必然的です。同志社女子大学としてはこの点について引き続き「改善につとめてゆく」必要があると思います。

学科・科目区分コメント

平均値が比較的高い学科のコメント、「いわゆるスキル科目については習熟度クラスが功を奏しているところもあると思われ」(国際教養学科)、「95%以上の学生から授業レベルが合っていたという回答を得た科目では、理解度を毎コマ確認しながら進めるなどの工夫がなされていた」(看護学科)に見られるように、クラス形態の工夫や各時間での創意工夫が功を奏しているようです。一方、「高度に専門性が高い科目など、学生が苦手な科目では3以下の評価の科目が散見された。評価の低い科目では学生に苦手意識を感じさせない授業の工夫が必要と思われる」(食物栄養科学科)など今後の改善の必要性もあるようです。改善の方向についてはアクティブラーニング研究会などを通し教員間で一層の情報交換が必要であると思われます。



Q4. 授業の双方向性

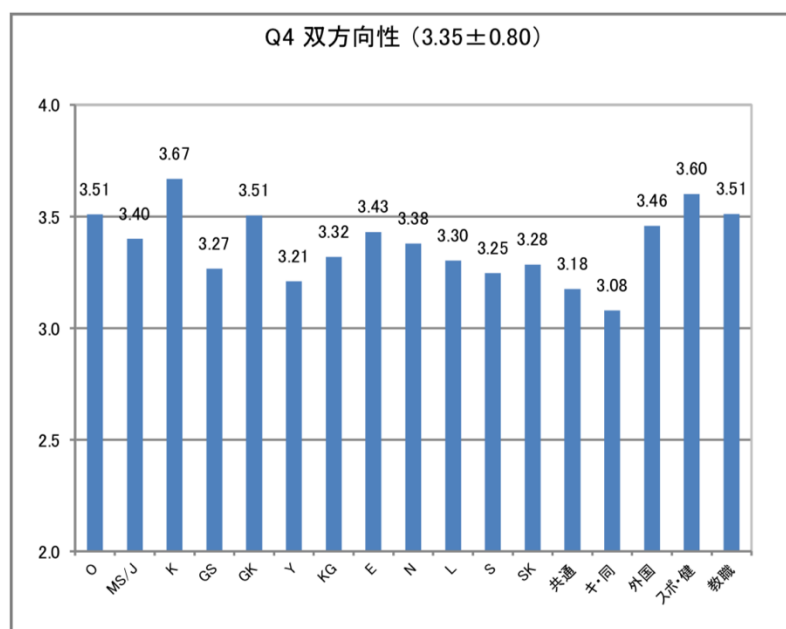
全体結果

「Q4: 教員からの一方向的な授業ではなく、教員と受講生又は 受講生同士の双方向性に工夫がされていましたか」

同じ区分の平均値が 3.24 (2017 年度春学期) → 3.31 (2018 年度春学期) → 3.35 (今回: 2018 年度秋学期) と全体としては高水準にあり、全体的な傾向として改善が進んでいると評価できます。双方向性のある授業はアクティブラーニングの中核をなす重要な要素です。ICT も更に利用しながら一層の向上が望まれるところです。同志社女子大学としてはこの点については、最重点項目として今後も「改善につとめてゆく」必要があると思います。

学科・科目区分コメント

平均値が比較的高い学科からは「実技を伴う演習科目は、双方のやりとりによって成り立つ科目のため、双方向性はかなり活発に行われていた」(音楽学科)、「教員との双方向的な授業の工夫が図られ、学生間のグループワーク、プレゼンテーションや振り返りなど、アクティブな授業運営がなされているものと思われる」(現代こども学科) などの肯定的なコメントが寄せられました。準備や評価に時間がかかりますが、多彩なアクティビティを準備しながら、学生が授業内で声を発することができる授業デザインが必要になると思います。



Q5. フィードバック

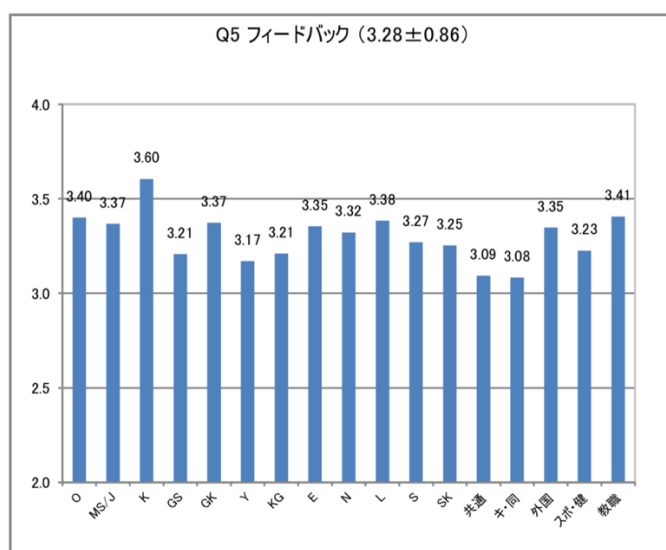
全体結果

「Q5: 提出物に対するフィードバック(採点、添削、マナビーでのコメント、チェック後の返却など)は効果的に行われていましたか」

同じ区分の平均値が 3.13 (2017 年度春学期) → 3.23 (2018 年度春学期) → 3.28 (今回: 2018 年度秋学期) と全体としては順調に改善が進んでいると評価できます。フィードバックも、またアクティブラーニングの中核をなす重要な要素です。特に、マナビー(LMS)を活用することにより、「課題の提出⇔フィードバック」が効率的にできると思われます。同志社女子大学としてはこの点については重点項目として「改善につとめてゆく」必要があると思います。

学科・科目区分コメント

各学科からは「[そう思う][ややそう思う]が 8 割という回答結果から、一定のフィードバック(採点や、添削等)はなされていると考えるが、クラス規模によって差が出ているところもあり、改善の余地もあると考える」(医療薬学科)、「肯定的な評価(そう思う・ややそう思う)の合計が約 80%であった。ラピートをはじめ登録者数の少ないクラスで評点が高くなる傾向が見られた」(外国語科目)、などの貴重なコメントが寄せられました。例えば、添削などにおいても、学生の書いたもの全てについてフィードバックする必要は必ずしもないのかもしれませんが、むしろ、学生が次へのステップとなるようなポイントを押さえた「選択的な」指摘が効果的であると思われます。教員もエネルギー配分を考え、時間を効率よく使うことが出来ます。このような点についても学内の関係する学科で議論を続けたいところです。



Q6. 理解を促進する工夫

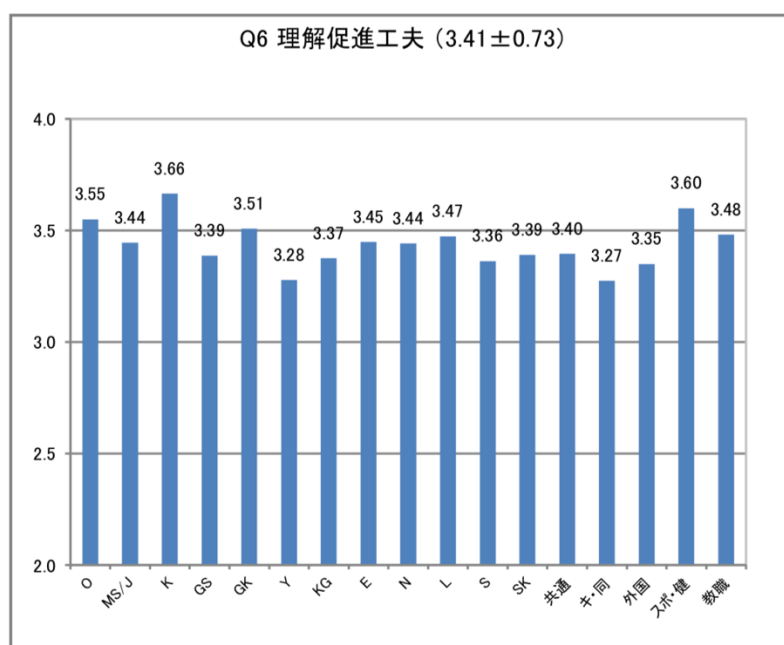
全体結果

「Q6: 言葉による説明だけではなく、受講生の理解を促進する工夫 がなされていましたか」

同じ区分の平均値が 3.32（2017 年度春学期）→ 3.38（2018 年度春学期）→ 3.41（今回：2018 年度秋学期）と全体としては順調に改善が進んでいると評価できます。これはどちらかというと「当たり前」の質問です。数値が示す通り、どの学科・区分でも、3.25 以上の平均が得られ、多様な工夫がなされている姿が目に見えます。この点については同志社女子大学としてほぼ「達成できた」ものと考え、今後は質的な議論（どのような工夫）に移行する時期に来ているのではないかと思います。つまり、具体的にどのような工夫がなされているのか、その工夫を集約して大学として共有してゆく方がいいと考えられます。

学科・科目区分コメント

各学科からは「おおむねよい評価。演習科目が多い性質もあり、作業や制作などで理解を促進する工夫は行われている」（メディア創造学科）、「資料の提示や配布、活用、映像等による説明やロールプレイングを取り入れるなど、様々な工夫がなされていると思われる」（現代こども学科）など創造的な工夫の様子がうかがえます。



Q7, 9. 自主学習

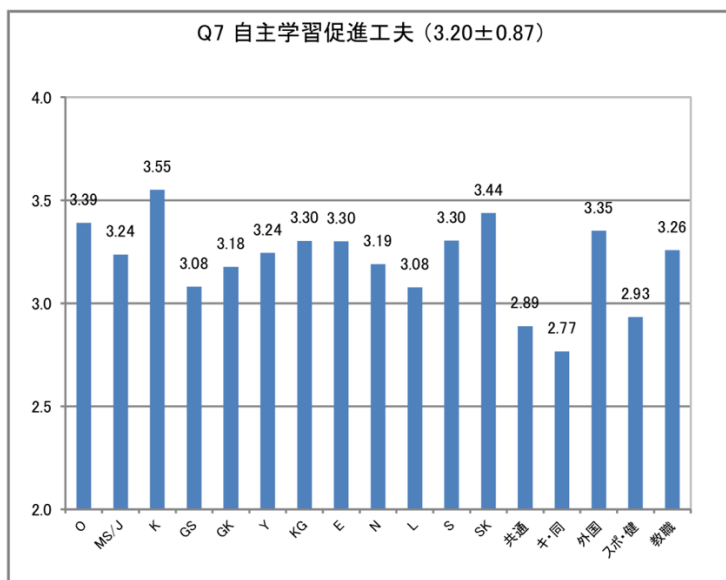
全体結果

「Q7: 自主学習を促す工夫がなされていましたか」

同じ区分の平均値が 3.08 (2017 年度春学期) → 3.16 (2018 年度春学期) → 3.20 (今回: 2018 年度秋学期) と全体としては順調に改善が進んでいると評価できます。しかし設定されている項目の中で低い水準にあるのがこの質問です。もちろん、科目群によってはそれほど授業外学習が求められないかもしれません。逆に外国語科目群の平均値が比較的高くなっているように (3.35) 復習や予習が必要となるものもあります。同志社女子大学としては自主学習については最重点項目として「改善につとめてゆく」必要があると思います。

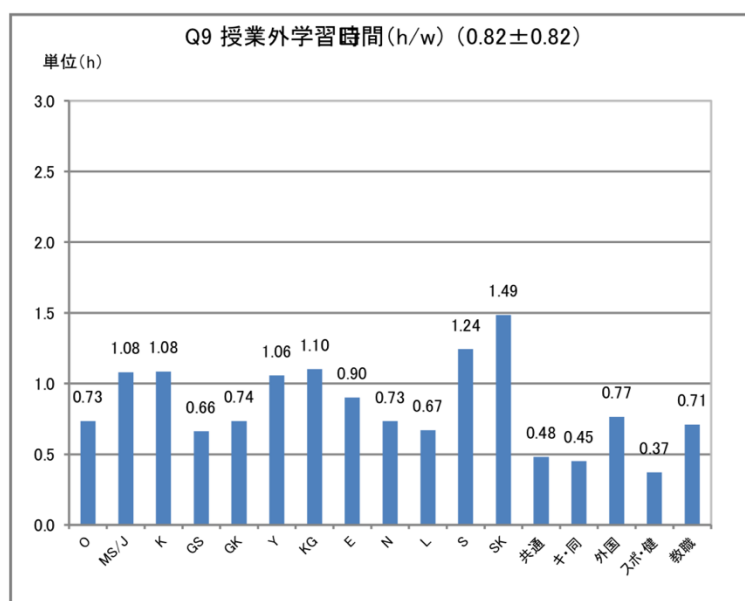
学科・科目区分コメント

平均値の高い学科からは「自主学習課題をほぼ毎コマ出すことに加え、学生が考え、楽しく学べる環境づくりを心掛けた科目では、高い評価を得ていたことから、参考になる取り組みであると思われる」「一方で、事前学習などをマナビーで提示することも試みたが、マナビーにアクセスした学生は 2 割弱であった科目もあり、主体的な学習姿勢を習得させるのは、難しい」(ともに看護学科)「おおむね良好であったが、教員が努力しても、学生の受け止め方によって違う結果が生じる場合があるようだ」(英語英文学科) など自主学習時間を増加に苦渋に満ちた取り組みがなされていることが分かります。



実際の学習時間に関しては各学科間で大きな相違が見られました (Q9: この授業の予習、復習、自主学習に 1 週当たり平均どれくらい時間をかけましたか)。設問が 1 週あたりの

学習時間であることから、例えば、半期の上限の24単位（仮に1科目が2単位と設定）の授業科目を受講しているとする、1週間あたりの総学習時間は、 $0.82 \times 24 \div 2 = 9.84$ 時間、1日に換算すると（土日を除いて）、 $9.84 \div 5 = 1.97$ 時間となります。授業外で約2時間の学習が多いか少ないかは議論が分かれるところだと思いますが、学生諸姉が行っているバイトの時間と比較すると一般的には格段に少ないことは明らかであると思います。各学科からは「[30分未満]の選択率が78.8%と圧倒的多数を占めている」（キリスト教・同志社関係科目）、「学科定員が300と大学内で最大であり、大規模な授業が多く、緻密な予習復習と、そのフィードバックが可能なクラスサイズではないことが想像される。クラス規模別であったり、必修・選択必修などの授業の位置付けごとの数値が望まれる」（社会システム学科）などコメントが寄せられています。万能薬（panacea）はありませんが、教員からは反転授業やブレンド型授業のような授業外課題との連携の方策を、各学科としては、1週2回の授業、2時間連続の授業、Team Teachingなどカリキュラム構成を一層柔軟に構成する必要に迫られていると思います。



Q8. 授業の工夫

全体結果

「Q8: 工夫してほしいと思ったことを選んでください」

この点については経年変化は算出しづらい部分がありますので、2018 年度秋学期の特徴を見ておきたいと思います。授業の工夫の中で最も選択率の高かった項目は、1 位) パワーポイントなど (15.3%)、2 位) 話し方 (7.4%)、3 位) 配布資料 (4.3%)、逆に低かった項目は、8 位) 私語対応 (1.8%)、7 位) 公平性 (2.2%)、教科書 (2.2%) でした。私語の比率が低いのは注意するまでもなく、授業中の私語がないからだと思われます。同志社女子大学としても授業の工夫については引き続き「改善につとめてゆく」必要があると思います。

学科・科目区分コメント

各学科からは、「建設的な要望よりも個人的要望や苦情が多く全体に反映させることが難しい場合が多い。教室がガラガラで前方に空席がたくさんあるのに後方に座って黒板の字が小さいというような声が寄せられる」(医療薬学科)、「パワーポイントが最大値にあることも、大規模なクラスで進行の関係から理解しづらい、ノートに記録しづらい状況があるものと思われる」(社会システム学科) など授業の工夫は教師だけでできるものではなく、あらためてよい授業は教員と学生のそれぞれの努力及び授業の環境整備が重要であることを再認識させられます。

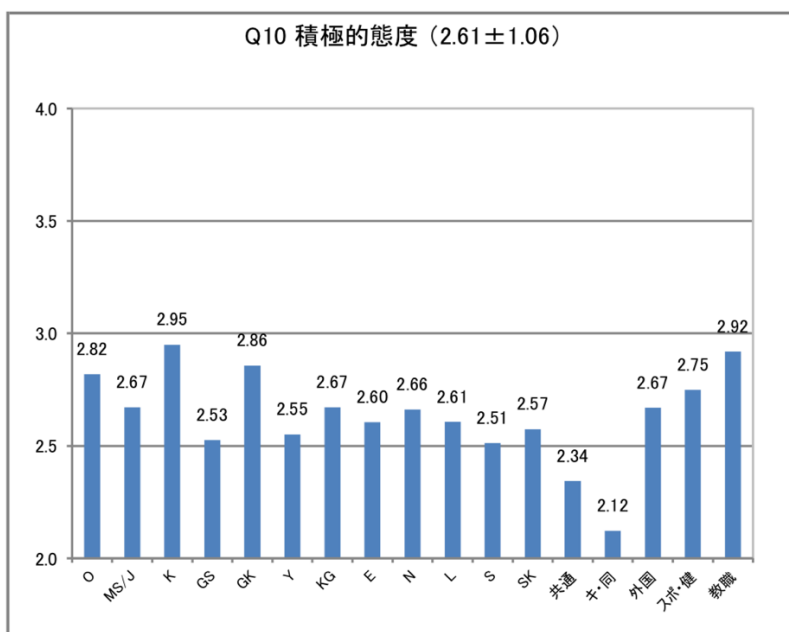
Q10. 積極性

全体結果

「Q10: あなたはこの授業に関して積極的に意見を述べたり質問をしたりしましたか」
 同じ区分の平均値が 2.39 (2017 年度春学期) → 2.51 (2018 年度春学期) → 2.61 (今回: 2018 年度秋学期) と全体としては改善が進んでいると評価できます。しかし低い水準にあるのは間違いのないところです。ここからは、教師中心の・教える内容中心の授業が多いことが想像されます。アクティブラーニングに象徴されるように 21 世紀の教育は「教師中心→学習者中心へ」「何を教えたか→何が理解できるようになったか・何ができるようになったのかへ」のパラダイムシフトしています。しかし同志社女子大学ではまだパラダイムシフトは起きていないようです。これは大学というよりはむしろ学生の意識がそのように変わっていないことにも問題はあると思います。同志社女子大学としてはこの点について、最重点項目として「改善につとめてゆく」必要があると思います。

学科・科目区分コメント

各学科からは「演習科目では活発に意見が述べられている。大教室での授業では低くなっているが、他の方法で質問をくみ上げているという意見もあった」(日本語日本文学科)、
 「SGD を行う授業では質問や意見交換が行われている。マイクを回して強制的に発言させる授業もあるが、授業の進度を遅らせるという弊害もあるため導入が難しい科目もある」(医療薬学科) など教師からの取り組みは積極的に行われているようです。ここでも教室の大小によってその積極性は変化するようです。大教室では必然的にグループワークなど教師からの働きかけが必要となります。もちろん、どの場合にも学生一人ひとりの意識の高さが求められるのは当然のことです。



Q11. 授業や関連分野への意欲

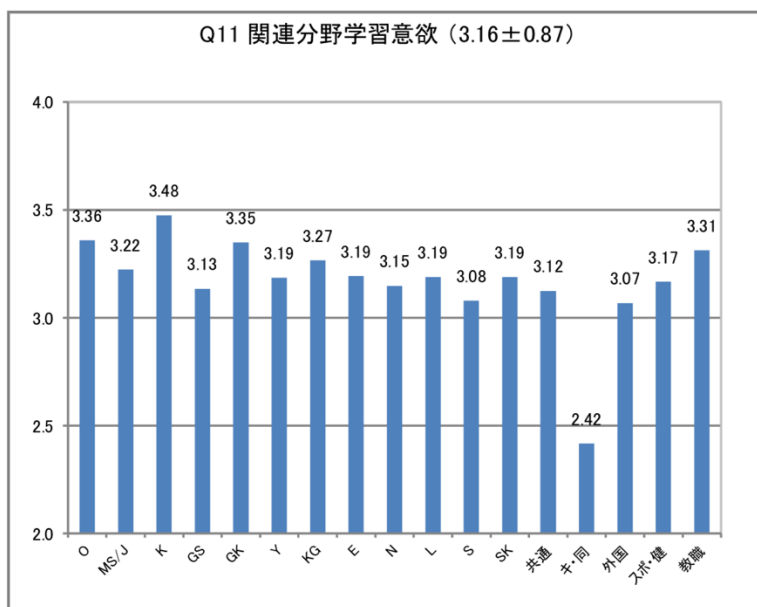
全体結果

「Q11: あなたはこの授業の分野又は関連分野の学習をさらに深めたいですか」

同じ区分の平均値が 3.06 (2017 年度春学期) → 3.14 (2018 年度春学期) → 3.16 (今回: 2018 年度秋学期) と全体としては順調に推移していると評価できます。一方で、キリスト教・同志社関係科目に関しては、全学科共通の理念を学ぶための必修科目であるため、相対的に低くなることは致し方ない結果であると思われます。むしろ問題は各学科・科目区分の授業にあるのかもしれません。各学科の授業においても積極的に建学の理念やキリスト教主義への関連性を示唆することが必要なのかもしれません。同志社女子大学としてはこの点について引き続き「改善につとめてゆく」必要があると思います。

学科・科目区分コメント

各学科からは「個人の興味はそれぞれであるため平均値での議論に意味はないが、学生個人で見たときにいくつかの授業では高い評価がつくようになってほしい」(メディア創造学科)、「食物科学専攻、管理栄養士専攻とも専門家として就職する学生が多く、就職後も新しい知識や技術が要求されることから、関連分野の学習をさらに進めたいと思えるような授業の工夫が必要と思われる」(食物栄養科学科) など今後の授業の改善の方向性も示されている。



Q12. 履修理由

全体結果

「Q12: あなたが この授業を履修した理由は何ですか」

この点については経年変化は算出しづらい部分がありますので、2018 年度秋学期の特徴を見ておきたいと思います。履修理由の中で最も選択率の高かった項目は、1 位) 必修 (47.2%)、2 位) 授業内容 (38.5%)、3 位) 資格 (10.7%)、逆に低かった項目は、10 位) DWCLA10 (0.7%)、9 位) 英語で実施 (1.3%)、8 位) 卒業研究に必修 (2.6%) でした。「授業内容」が上位にランクされているのは学生がシラバスをよく読んでいることの表れであると思われます。一方その他に含まれているのかもしれませんが、前年度の授業アンケートの結果は履修理由に入っていません（アンケート項目に含めるべきかもしれません）。前年度の授業アンケートの高いか低いか注目することは当然であるように思います。学生諸姉はもっと見るべきではないでしょうか。この点については今後のアンケート項目の改良も含め、期待したいところです。

学科・科目区分コメント

各学科からは「本学科は教員免許及び保育士資格取得のための必修が多いことから、[必修]がほぼ5割の数値となっているが、[授業内容]という項目においても3割の数値を示している。学生の学びへの意欲に応えるものになっているととらえたい」（現代こども学科）、「選択科目について、[授業内容]、[授業方法]、[英語で実施]の回答が多かったが、妥当であろう」（英語英文学科）といったコメントが寄せられました。

Q13. 到達目標達成への指導

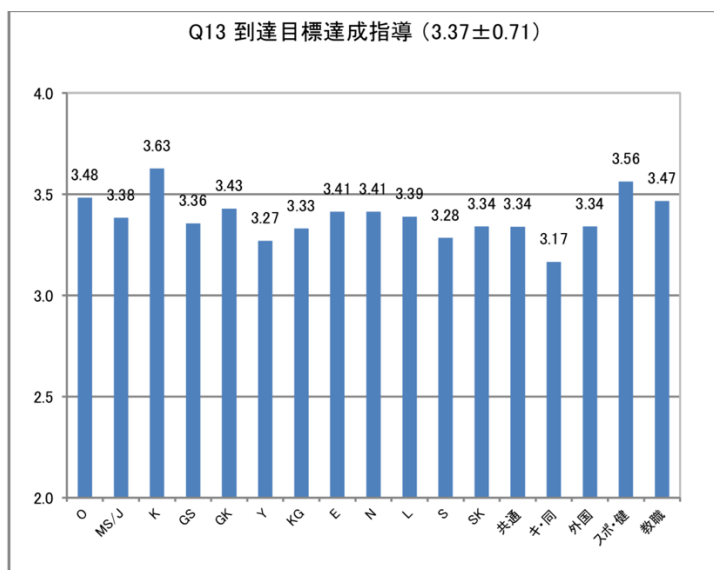
全体結果

「Q13: 到達目標を達成しやすいように指導がなされていましたか」

同じ区分の平均値が 3.26 (2017 年度春学期) → 3.33 (2018 年度春学期) → 3.37 (今回: 2018 年度秋学期)、など各学科で平均が 3.25 を上回り、キリスト教・同志社関係科目に関しても肯定的な傾向にあります。これらはいわば授業実施に関する Q1～7 の工夫や取り組みの成果が現れているものと考えられます。同志社女子大学としてはこの点については、最重点項目として今後も「改善につとめてゆく」必要があると思います。

学科・科目区分コメント

各学科からは「一人ひとりの学生と時間をかけて向き合うという先生方の努力が評価されていると考える」(国際教養学科)、「学科として、到達目標が達成しやすいような指導の工夫についての FD を行うなどの取り組みが必要かもしれない」(食物栄養科学科) というコメントが寄せられています。



Q14. 到達目標達成

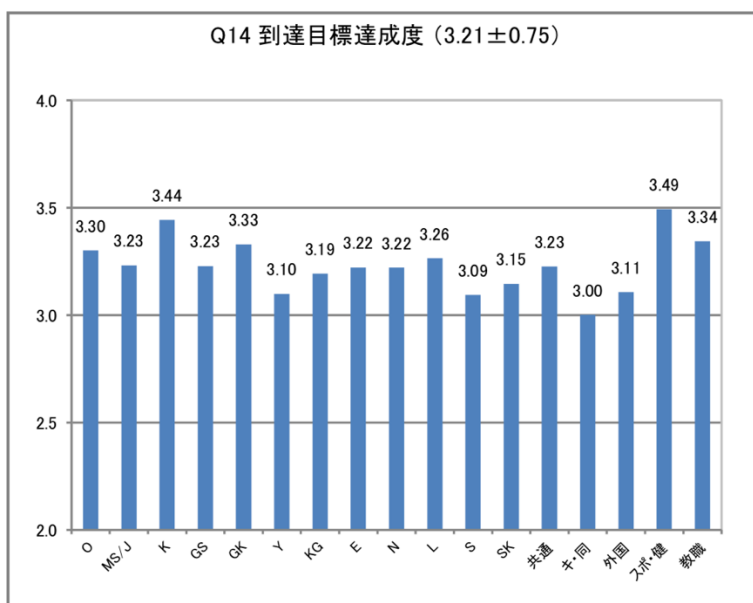
全体結果

「Q14: あなたは到達目標を達成できたと思いますか」

同じ区分の平均値が 3.06 (2017 年度春学期) → 3.15 (2018 年度春学期) → 3.21 (今回: 2018 年度秋学期)、と全体としては順調に推移していると評価できます。この点については重点項目として引き続き「改善につとめてゆく」必要があると思います。

学科・科目区分コメント

各学科からは「低い評価の科目もあり、さらなる工夫が必要であるが、この問いに関しては、自己評価の低さという問題もあり、また、授業を通してより高い水準を目指すようになった結果の評価であるということも考慮されなければならない」(日本語日本文学科)、「目標達成の感じ方に個人差があるように見受けられる。特に「わからない」の回答については、13 の回答と同じく、学びに対しての意識が希薄な学生が少なからず存在していると気づかされる。今後はそのような学生に対しても、学習意欲を向上させる刺激を与え、学びの喜びを少しでも感じてもらえるように努力すべきである」(音楽学科)などのコメントが寄せられています。この点については学生自身が控えめで達成度を過小に評価する傾向があるのかもしれませんが、例えば、科目の達成目標—1 つ 1 つの授業の達成目標の明確化、科目にもよりますが小テストなどの形成的評価の機会を多く持つなど、達成度が明確に分かるような仕組みも一層必要であるように思います。



Q15. DWCLA10

全体結果

「Q15: DWCLA10 の内、この授業の履修を通して その獲得や向上に役立ったと感じられるものを すべて選んでください」

この点については経年変化は算出しづらい部分がありますので、2018 年度秋学期の特徴を見ておきたいと思います。DWCLA10 の中で最も選択率の高かった項目は、1 位) 思考力 (49.6%)、2 位) 分析力 (31.4%)、3 位) コミュニケーション力 (16.5%)、逆に低かった項目は、10 位) リーダーシップ (3.4%)、9 位) 変化対応力 (6.4%)、3 位) 思いやる力 (8.1%) でした。大学としては思考分析力が上位を占めているというのは妥当であるように思います。DWCLA10 が出来てかなりの年月が経ちますが、一方でこの項目の再検討もする時期にきているのかもしれません。例えば、下位にランクされた、変化対応力と授業との関係は明瞭であるとは言いきれません。また創造力に含まれるのかもしれませんが、アントレプレナーシップ（起業家精神）を考えると「問題発見能力」は大学において育成すべき重要な項目であろうと考えられます。問題を教員が設定しているだけでは、リーダーシップも自己管理力も自己実現力も身につけません。

学科・科目区分コメント

各学科からは「[思考力] の選択率が 43.8%で最多であった。このことは本科目区分が道徳や社会的・宗教的規範を教えるものでなく、当然のこととして学術的内容で構成されていることを裏付けると思われる」「[思いやる力] の選択率が 16.8%と比較的高い。このことは本科目区分が建学の精神を伝える役割を果たすこと に一定程度成功していることを裏付けると思われる」（キリスト教・同志社関係科目）、「特に選択率が低かった[リーダーシップ][コミュニケーション力][プレゼンテーション力]などについては、強化する方策を探りたいと思います」（人間生活学科）といったコメントが寄せられています。

その他：

学科・科目区分コメント

各学科からは「教員による授業評価報告の提出者は7名であり、教員の意識は課題である」（看護学科）、「嘱託講師の方々とは年1回の懇談会を設けており、そこで本結果の概要を伝えるとともに情報交換を図りながら、授業の質の向上に取り組みたい」（メディア創造学科）、「嘱託講師を含めても23名という他と比べれば極端に少ない人数の教員が密に連携を取りながら国際教養学科の教育を行って来た成果が現れていると考える。その真摯な姿勢は、その全員が対象科目すべてで授業評価を実施している点からも明らかであろう」（国際教養学科）などのその他のコメントが寄せられています。今後も授業アンケートを在り方を考える上でも、このようなその他、全般的なコメントを歓迎したいと思います。

まとめ

45,203（延べ回答者数）、1,667（実施クラス数）という膨大な数字が示す通り、いまや巨大プロジェクトとなった観すらする授業アンケート。ここまで読み進めて頂きありがとうございました。結果分析を見られてどのような感想を持たれたでしょうか？ここからは全体として同志社女子大学がよい方向に向かっている姿が浮き彫りになってきていると思います。その中で、大学としてほぼ達成できた項目と今後力を注ぐべき点が明確になってきていると思います

1. ほぼ達成出来た項目

- シラバスと授業の合致（Q1）
- 受講生の理解度を確認しながらの授業展開（Q2）
- 理解を促進する工夫（Q6）

2. 今後重点的に取り組むべき項目

- 授業の双方向性（Q4）
- 効果的なフィードバック（Q5）
- 自主学習の促進（Q7, 9）
- 積極的に意見を述べる態度（Q10）
- 到達目標達成への指導（Q13）
- 到達目標達成（Q14）

3. 引き続き改善に努めてゆく項目

- 授業レベルとの合致（Q3）
- 授業の工夫（Q8）
- 授業や関連分野への意欲（Q11）
- 履修理由の自己選択化（Q12）
- DWCLA10（Q15）

一方で総評をしながらいくつかの問題点も明らかになってきています。

- A) 実施率は96%ですが、今後一層100%に近づける努力が必要。また学科間での差もあるので、実施率が比較的低い学科については対策を検討する必要があります。
- B) 残念ながら、データの蓄積を生かし切れてるとは言えません。この点については過去10年間程度のデータを（必ずしもおなじ項目ではないかもしれませんが）分析し、授業改善の方向性を探る必要。またその分析の際には探索的因子分析（EFA）や相関関係など統計分析の手法も活用することが求められると思います。これまでの膨大なデータから授業改善の方向性も見えてくると期待されます。
- C) 質問項目の再検討。DWCLA10の項目など質問項目の修正や入れ替えなどをしてゆく必要があると思います。

今後は、問題点の改善にも努めながら、重点的に取り組むべき項目を注視する必要性があると思います。

Wiggins and McTighe を引用し、西岡（2008）は「教育によって最終的にもたらされる結果から遡って教育を設計する」「逆向き設計」の重要性を主張しています。今、まさに私達も、種類は異なるものの、この授業アンケートという「教育結果」をもとに新しい「授業デザイン」「カリキュラムデザイン」の設計が求められているのではないのでしょうか。

一般的に、授業アンケートは授業をした後の「結果」に過ぎないと思われがちですが、「次のスタート」のための示唆を多く含んでいます。そのためにも、自分自身の授業アンケート結果（ミクロな視点）と同時に学科や大学、ひいては 21 世紀の教育の方向性（マクロな視点）を考え合わせる時期に来ているのだと思います。

教師の仕事は「未来からの留学生」（加藤寛、1992）を教える事だと思います。そのためには私達も年々授業を変革することに迫られています。容易ではなさることですが、そこに教育のダイナミズムと醍醐味があるのも事実です。今後も、授業の PDCA サイクルを意識しながら、同志社女子大学の新しい授業を創り出してゆくことが求められていると思います。

A little difference makes a big difference.

参考文献：

西岡加名恵（2008）『逆向き設計で確かな学力を保証する』東京：明治図書

加藤寛（1992）『慶應湘南藤沢キャンパスの挑戦：きみたちは未来からの留学生』東京：東洋経済新報社